

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520050

研究課題名(和文) 大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究

研究課題名(英文) A New Approach to the Origin of Mahāyāna Movement on the Basis of Art Historical and Archeological Evidence

研究代表者

荒牧 典俊 (ARAMAKI NORITOSHI)

龍谷大学・仏教文化研究所・研究員

研究者番号：30027536

研究成果の概要(和文):

インド佛教美術史における「佛像の出現」という根本問題とインド佛教思想史における「大乘佛教の起源」という根本問題は、従来までの多数の学者による研究の蓄積にもかかわらず、未解決な難問であった。本研究は、これら二つの革新運動の根本には「三昧のエクスタシーにおいて諸佛に直々にま見える」という宗教体験があるのであり、それらは、この「不退転」「無生法忍」ともよばれる宗教体験を体得しようとする宗教運動の二側面だ、という作業仮説を提案することによって解決することを試みた。この作業仮説は、佛教考古学・美術史の遺跡・遺物史料によって十分に証明されることを示した。また、新発見の佛教遺跡「カンガンハリ大塔」を調査して、写真資料と平面図を、世界の学界に提供した。

研究成果の概要(英文):

The two fundamental *desiderata* commonly shared by the two disciplines, Buddhist studies and Buddhist art history, are as follows: (1) How has the Buddha image emerged from within the Buddhist *stūpa*-complex after a long aniconic tradition of Early Buddhism? and (2) How has Mahāyāna Buddhism originated after a long conservative history of Early Buddhism? And that around the same time-and-place (say, in the first century A. D. at Mathurā)? The present study has tried to solve these two cruxes once for all by proposing the working-hypothesis that these two innovations are the two aspects of one and the same religious movement to experience Buddhas more and more directly in *samādhi* or ecstatic concentration of mind. The working-hypothesis has been sufficiently evidenced by archeological and art historical evidence. In the appendix the catalogue of the 59 panels and the inscriptions on them of the newly discovered Buddhist monument, "the Great Stūpa at Kanganhalli," has been provided.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 印度哲学・仏教学

キーワード：仏教学・仏教史全般、佛教美術史

1. 研究開始当初の背景

インド佛教美術史における「佛像の出現」という問題とインド佛教思想史における「大乘佛教の起源」という問題は、明治以来の近代的学問の発展を通じて多数の研究者によって研究されつづけてきた根本問題であったにもかかわらず、いまだに未解決な難問であった、とあってよい。研究代表者の荒牧は、元来、インド佛教思想史の研究者であったが、インド佛教美術史研究の必要を痛感するようになって、そちらの方の研究にも手を染めてきた。ようやく、これら二つの難問を、別々の二つの学問分野の問題として、別々の方法によって研究していたから、未解決であったのだ、と気づくに及んで、それら二つの問題を、一つの宗教体験「三昧のエクスタシーにおいて諸佛に直々にま見える」を体験しようとする宗教運動の二つの側面だ、と解釈することによって、解決可能だ、と確信するようになった。研究代表者荒牧のインド佛教思想史の文献研究の成果がまとまってきて、五項目ほどの作業仮説が完成した段階で、本研究を申請して、インドにおいて佛像が出現する直前と直後、及び大乘經典が創作される直前と直後の段階の遺物と遺跡を、現地の博物館及び発掘現場へ出かけて調査することとしたのであった。いうまでもなく佛教文献の文献學的研究の成果は、可能な限り、考古學・美術史の実物史料によって実証されなくてはならないからである。

2. 研究の目的

「佛像の出現」と「大乘佛教の起源」という二つの根本問題を、一挙に同時に解決するために、つぎのような五項目よりなる作業仮説を構築してきた。

(1) 大乘經典運動は、既に始まっていた初期ヒンドウイズムと一体化した宗教運動であった。

(2) 佛塔を中心とする文学・美術の芸術運動は、原始佛教諸部派全体の運動であった。

(3) 原始佛教諸部派全体の伝統を革新する芸術運動は、新しい芸術的なしかたで諸佛を直接体験しようとしたであろう。

(4) インド佛教美術史における「佛像の出現」とインド佛教思想史における「大乘經典の起源」は、ひとしく新しい芸術的なしかたで体得される宗教体験「不退転」「無生法忍」にもとづくのであり、「三昧において諸佛に直々にま見える」三昧体験から始まった。

(5) ナーガールジュナは原始佛教の「縁起」の真理と大乘佛教の「空性」の真理が、同一の真理に属しあっていることを認識して大乘佛教哲学を創始し、それが、ガンダーラ地方において瑜伽行唯識哲学へと発達した。本研究は、これら五項目の作業仮説を、インドにおいて佛像が出現し、大乘經典が創作され、大乘佛教哲学が思惟されていたに相違いない現場に立ち、現物を見て、可能な限り、検証することが目的である。

3. 研究の方法

ドイツの H. Lüders, D. Schlingloff などの研究者が確立してきた佛教文献の文献學的研究の成果と佛教美術史研究の成果を、可能な限り、精確に分析的に相応させる分析的方法をふまえながらも、一つの文献全体、一つの遺跡全体などを総合的に理解して宗教運動の流れを理解する総合的方法を加味して、二つの研究分野にまたがる学際的研究の可能性を追求する。具体的には、「佛像の出現」の直前から直後へ、「大乘經典の起源」の直前から直後へかけて中心的役割を果たした「帝釈窟説法」「大臣マハーゴーヴィンダ」「三道宝階」の三説話に注目して、それら三説話の背後にある宗教体験が、どのように最初の大乘經典『八千頌般若經』の最古層部の宗教体験へ発達するかを解明する。

4. 研究成果

上述した五項目の作業仮説それぞれについて、つぎのような諸事実を確認することができた。

(1) 「大乘經典運動は、既に始まっていた初期ヒンドウイズムと一体化した宗教運動であった」については、大乘佛教直前段階のマトゥラー近郊の初期ヒンドウイズム遺跡から出土した巨大なナーガ像の伝統が、今回、調査した南インドのカンガンハリ・ナーガールジュナコンダ・アマラーヴァティー大塔の正面のナーガ像へと伝えられていることを確認した。ナーガ信仰をもつシヴァ派ヒンドウイズムが、大乘直前段階の佛教とともに南下していったと考えられる。

(2) 「佛塔を中心とする文学・美術の芸術運動は、原始佛教諸部派全体の運動であった」は、現存する佛教芸術をともなった佛塔・石窟などの佛教遺跡が、長老部系の雪山部・説一切有部など、大衆部系の東山住部・西山住部などの諸部派に帰属することからしても明らかである。

(3)「原始佛教諸部派全体の伝統を革新する芸術運動は、新しい芸術的なしかたで諸佛を直接体験しようとしたであろう」については、とくに上述した三説話が、何れも、佛が一時的に不在になった後で、新しい芸術的なしかた、例えば、ハーブの伴奏で讃佛偈をうたいつづける、とか多数の諸佛の名号を唱えつづける、などのしかたで、三昧のエクスタシーに入定して、あらためて佛にま見え、佛の説法を聴聞することをテーマとすることを指摘し、そこに「三昧において諸佛の直々にま見える」宗教体験の発達が認められる、と考えた。だからこそ、これら三説話の場面を彫刻するレリーフの中心に最初の佛像が出現するのである。今回の調査では、マトゥラー博物館において、そのような三説話の場面に出現したばかりの最初の佛像のいくつかを確認することができた。他方、このような新しい宗教体験の発達が、大乘佛教直前段階の文献である『マハーヴァストゥ』の『十地經』にも認められるのであり、それが、最初の大乗經典である『八千頌般若經』の最古層へと発達するのである。

(4)「インド佛教美術史における『佛像の出現』とインド佛教思想史における『大乘經典の起源』は、ひとしく新しい芸術的なしかたで体得される宗教体験『不退転』『無生法忍』にもとづく」については、「佛像の出現」が、新しい宗教体験「三昧において諸佛に直々にま見える」に由来することは、(3)で述べた如くであるが、「大乘經典の起源」は、つぎの如くに説明されるであろう。上述の『マハーヴァストゥ』の『十地經』において、つぎのような大乘經典運動の根源となる宗教体験が発達しつつある。誓願儀礼即ち發菩提心儀礼を行って菩薩になる。そのような初業菩薩は、布施などの菩薩行を実践する。多数の諸佛の名号を唱えつづけて三昧のエクスタシーに入り諸佛に直々にま見える——この位を「不退転」とよぶ。ここにおいて諸佛から「将来、しかじかの名の佛になるであろう」という授記を受ける。最初の大乗經典『般若經』の最古層は、まさしく、これら四項の宗教体験の根源に生きている根本真理「空性」をほめうたいつづける文学として成立する。それらの宗教体験が、どのように「空性」において根拠づけられるか、をほめうたいつづけて、「空」「無相」「無願」の三三昧に入定し、「不退転」即ち「無生法忍」の人間存在の根本転回を体得することを目的としていた、と考えられる。しからは大乘經典運動とは、これらの新しく体得されるようになった宗教体験の根源に生きている根本真理「空性」即「法性」即「真如」即「法界」をほめうたいつづけて「不退

転」即「無生法忍」を体得するための宗教運動であった、ということができる。

(5)「ナーガールジュナは原始佛教の『縁起』の真理と大乘佛教の『空性』の真理が、同一の真理に属しあっていることを認識して大乘佛教哲学を創始し、それが、ガンダーラ地方において瑜伽行唯識哲学へと発達した」については、つぎのような興味深い考古学的事実に注目した。元来、原始佛教段階の佛教寺院は、佛塔域と僧坊域よりなっていて明確に区別されていたのであるが、ナーガールジュナゆかりのナーガールジュナコンダ都市遺跡において佛塔及びそこから出現しはじめた佛像を、僧達が禅観するための僧坊入口あるいは僧坊内に設置する禅観院ともいべき形式の建築が、多数つくられるようになってきている。近年の研究によってガンダーラにおいても、アジャンタ後期窟においても、同様な禅観院あるいは禅観窟が、つぎからつぎへと建造されていくことが指摘されている。これは、原始佛教の「縁起」の禅観と大乘佛教の諸佛・諸菩薩の根源に生きる「空性」の禅観を融合した大乘佛教哲学を思惟するための禅観院・窟であったと考えられる。以上の研究成果に加えて、インド考古局によって近年発見・発掘されたばかりの佛教遺跡「カンガンハリ大塔」を、二度にわたって調査し撮影してきて、写真資料と平面図を世界の学界に先んじて提供できたことを特筆しておきたい。今後の研究のための基礎となるにちがいない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{ 雑誌論文 } (計 1 件)

Noritoshi Aramaki “Apropos of the Three Legends of Buddha’s Dis- and Re-appearance” (本研究の報告書の一部として出版)

{ 学会発表 } (計 1 件)

Noritoshi Aramaki “The *Mahāyānasūtra* and *-śāstra* Movements as Reflected on the Development of the Architectural Plan of the Indian Buddhist Stūpa-Complex” (台北で開催される第十五回国際佛教学会において 2011年6月25日に発表予定)

{ 図書 } (計 2 件)

荒牧典俊 『ブッダのことばから浄土真宗へ』自照社出版、2008年
荒牧典俊 『大乘莊嚴經論第一章の和訳と注

解』(共著)自照社出版、2009年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒牧 典俊 (ARAMAKI NORITOSHI)
龍谷大学・仏教文化研究所・研究員
研究者番号：30027536

(2) 研究協力者

中西 麻一子 (NAKANISHI MAIKO)
佛教大学大学院博士課程
杉本 瑞穂 (SUGIMOTO MIZUHO)
龍谷大学大学院博士課程
小沢 千晶 (OZAWA CHIAKI)
大谷大学助教 (2008年当時)
村田裕美 (MURATA YUMI)
大谷大学大学院博士課程修了

(3) 海外研究協力者

Monika Zin ミュンヘン大学教授